

JELANews

ジェラ ニュース 第11号 2006年11月15日発行 発行責任者 ローウェル・グリテベック

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援 ・ アジア子ども支援 ・ ブラジル子ども支援 ・ ボランティア派遣 ・ 奨学金制度 ・ 宣教師支援

社会に出ていき 手をさしのべる

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、
旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。」
マタイによる福音書 第25章35～36節



グループ・ワークキャンプ2006 Full Service(全面的奉仕)

毎年の夏、全米各地とその周辺地域で30年近く実施されている超教派の催し、グループ・ワークキャンプ。JELAは日本福音ルーテル教会と協力して、2001年から日本の青少年を毎年このキャンプに派遣しており、今夏も18名の若者が参加しました。一行はミシガン州の教会員宅でホームステイを楽しんだあと、一週間の奉仕キャンプに参加しました。一人暮らしのご老人や経済的に貧しい家庭の家屋修繕奉仕に取り組みながら、毎日の賛美集会や聖書の学びをとおして信仰を深められ、8月上旬に無事帰国しました。参加者全員のレポート(抜粋版)は4ページ以下を、来年の募集内容は6ページをご覧ください。

この号にはこんな記事が

ブラジル子ども支援 ブラジルの近況と新たな動き(L・グリテベック) ブラジルの光と影(星崎ポール) 劇団「アルチマーニヤ」(古川文江)	2～3
グループ・ワークキャンプ2006 参加者レポート 2007年度募集要項	4～6
難民支援 ごくごく、あたりまえのこととしての難民支援(鈴木律文)	7
お知らせ その他 キルト展とワインパーティ インド・ワークキャンプ参加者募集中! バングラデシュの二人の高校進学を支援 インドに女性訓練センター建築 支援者一覧 編集後記	8

ブラジルの近況と新たな動き

JELA事務局長 ローウェル・グリテベック



まず始めに、ブラジル・プログラムをご支援くださる皆様に心からのお礼を申し上げます。皆様の暖かいご支援により、ブラジルの子どもたちは栄養豊かな給食と教育の機会を享受するにとどまらず、貧しく厳しい現実の中にも希望あふれる将来があることを示され、喜んで生活しています。ブラジルの子どもたちに代わり感謝いたします。

○ブラジルの教会との協力

今年も8月下旬に私とJELAの職員の古川と星崎はブラジルに出張する機会が与えられ、現状を視察してきました。今回はブラジル・ルーテル告白福音教会議長のウォルター・アルトマン牧師をお尋ねする機会もありました。アルトマン議長は、サンパウロのファヴェーラに生活する子どもたちを支援する日本の兄弟姉妹の皆様への感謝の言葉を述べられ、ブラジルの貧しい子どもたちに基礎教育の機会を確保することはブラジル・ルーテル教会の大切な使命であり、日本の私たちとのパートナーシップがこの使命においても今後も力強く継続されるよう心から願っていると語られました。

○厨房改修の成果

前回のJELA NEWSで、皆様からのご協力を得てヘコンシリヤサン青少年プロジェクトの厨房改修工事計画のために12,000ドルを送金した旨をご報告しました。今回の出張で私たちは美しく変貌した厨房を目の当たりにし、言葉を失うほどの感激を味わいました。厨房は広く、明るく、清潔で、今では青少年センターに集う500名からの青少年すべての給食と軽食をまかなうことが可能になりました。また念願だった給湯設備も整い、食器洗浄も容

易になったと大きな喜びの声を聞きました。皆様のおかげで、ヘコンシリヤサンの子どもたちは以前にも増して喜んで学び、遊び、食し、また幸いにも医療と歯科の治療も受けていることを感謝してお伝えします。

○青年就労プログラムの厳しい現状

カーザ・マテウスも子どもたちの生活向上に日々努力しています。中でもJELAが支援する青年就労プログラムは大きなチャレンジを続けています。青年就労の現実是非常に厳しく、昨年度のプログラム修了生60名の内、正式な職業に就けた青年はわずか3名との報告も受けています。根気ある活動に対する支援が必要です。

○リオでの新しい支援計画

今回の出張のもう一つの目的は、サンパウロ市以外での活動を知ることでした。多数の要望がある中で、JELAは新たにリオデジャネイロのファヴェーラの子どもたちを支援することを検討しています。ご存知のようにリオデジャネイロは美しい海岸を持つ大観光都市として有名ですが、同時に治安の悪さでも定評があります。イパネマ海岸に位置するルーテル・イパネマ教会のすぐ隣にも貧しく危険なファヴェーラがあります。イパネマ教会が運営するクレッシュ・ボン・サマリターノ（良きサマリア人保育所）には近隣のファヴェーラから毎日3歳から8歳の200人の子どもたちが通所し、給食と教育の援助を受けています。この子

どもたちは施設でシャワーを浴び、施設が用意するスウェット上下の制服（写真上）に着替えます。子どもたちの貧しい家庭では子どもの身体を洗い、清潔な衣服を着せることが難しいからです。しかし、この施設は外部からの経済的支援が乏しく、米、豆などの必要最低限の食品すら買う資金が充分ではありません。もし皆様のご理解とご協力がいただけるなら、是非リオの子ども支援を開始し、食料品と100着の制服購入のための援助をしたいと願っています。

○日本政府の資金協力の可能性

リオデジャネイロ、サンパウロ、ポルト・アレグレの各地の日本総領事館も訪問し、支援先施設に対する日本政府の資金協力の可能性について話し合いました。その結果、ポルト・アレグレの子どもの施設が進める校舎建築計画に対して、日本政府の資金協力の道が開けるようJELAはこれから申請手続きに向けて協力することになりました。JELA NEWS誌上で喜ばしいご報告ができるよう、どうぞご支援ください。

○ブラジル支援と世界宣教

今回、私は2回の日曜日をブラジルで過ごしました。日程の関係でサンパウロ教会の聖日礼拝に参加できなかったのは残念でしたが、代わりにイパネマ教会と南米教会の礼拝に出席し、恵みの時を経験しました。特に南米教会とジアデマ集会では礼拝の中で私は「良きサマリア人」をテキストに世界宣教についてお話しする機会が与えられました。キリストは「あなたがたも行って、同じようにしなさい」と簡潔にしかも力強く私たちに語ります。その意味は、国籍や社会的・経済的な地位に関係なく、私たち全ての者は主の働きへと呼ばれているということです。主が示されるように、私はこれからも皆様と手を携えてブラジルの子ども支援を展開したいと心から願っています。

○ボランティアの継続的派遣

最後になりましたが、JELAがブラジルに派遣したボランティアの石丸哲平兄をお祈りに覚え、お支えくださいましたことを感謝いたします。殊にサンパウロの日系ルーテル教会の信徒の皆様には哲平兄を親しいお交わりの中に暖かく迎えてくださり、実生活のあらゆる面でお支えをいただき、誠にありがとうございました。同兄は去る9月24日、2年間の奉仕を終えて無事に帰国しました。次号JELA NEWSでは詳しい報告があると思います。哲平兄に続き、ブラジル・ボランティアに志願なさりたい方がいらっしやいましたらどうぞご応募ください。お待ちしております。



ブラジルの光と影 JELA職員・星崎ポール



◇はじめてのブラジル

この夏初めてブラジルを訪れることになり、グリテバック事務局長と古川事務長に同行しました。私たちはそこで、皆様が支援してくださっているJELAブラジルプロジェクト関連の施設を訪問しました。今回はとくに、サンパウロ州とリオグランデ・ド・スール州にある施設を視察しました。JELAニュースの記事を読み、写真を見るだけではなく、やはり現地に行つて目で見ること、鼻で匂いをかぐこと、耳で聞くこと、そして肌で感じるこ
とが、いかに大切なことかを実感しました。

◇光と影

はじめての訪問の印象を一言で表現すると、二つのブラジル、すなわちブラジルの「影」と「光」が見えました。「影」とはファヴェーラ、サンパウロ州やポルトアレグレの大都市に点在する貧困地区のことです。そして、「光」とはファヴェーラに住む子どもたちと、その子どもたちの教育・健康・精神面を支え、支援する人たちのことです。

◇影の現状

最初に訪れたサンパウロ市を空から見たとき、オフィスビルと、ほとんど白とレンガ色の住宅が立ち並ぶ、広大な近代都市に見えました。まぶしい太陽の光を反射する建物の白い壁と、その光を吸収するかのような周りの森林の濃い緑が目につかびます。地上に降りても道は広く舗装され、バスや電車の公共施設は整っていました。しかし、中心街外れの所々に、家とは言えない建物の密集地帯(ファヴェーラ)がありました。建物の壁はベニヤ板をつなぎたものや崩れかけたレンガ、石などでできたものばかりでした。窓や屋根すらもない建物も少なくありません。建物と建物の間にある通路は人ひとりがやっと通れる位の幅で、周りの壁が中に傾いているように感じました。

サンパウロ市から車で1時間ほどの場所にあるファヴェーラでは、何重にもとり巻くように建物が一つの湖を囲んでいました。この湖はサンパウロ市の水源として使用されているはずでしたが、まともな水道設備がないファヴェーラによる汚染で水の安全性が危ぶまれていました。リオグランデ・ド・スール州のポルトアレグレ市内では、近代的な放送局のビル

がそびえる向かい側に、狭い区域に千世帯以上のファヴェーラがありました。途中の道端には数日放置されたネズミの死骸もありました。

◇影に差し込む光——子どもたちの輝き

このような環境で住んでいる人たちは、まぶしいほどのブラジルのサッカー、サンバやシュラスコの影になってしまいます。それでも私たちを笑顔で迎え入れてくれました。ファヴェーラに住む子どもたちもとても明るく、とくに教育福祉施設に通う子どもたちは、授業や職業用トレーニングに目を輝かせながら熱心にクラスを受けていました。今回サンパウロ州のファヴェーラ地区にある福祉施設プログラム・コムニタリオ・ダ・ヘコンシリアサンとセントロ・コムニタリオ・カーザ・マテウスを訪れ、JELAを通して実現された皆様からの支援の効果を確認することができました。

ヘコンシリアサンの施設ではリフォームされたすばらしいキッチンによって、そこに通う400人以上の子どもたちのために食事を効率良くつくり、スムーズに分配できるようになりました。カーザ・マテウスでは、施設でトレーニングを受けた青年たちが近くの工場で働けるようになり、実際にその工場も見学できました。また、日系ルーテル南米キリスト教会のジアダマ・プロジェクトの一環として、サンパウロ州のジアダマ地区のファヴェーラに住む子どもたちを毎週教会に招くために、バスを手配して送り迎えを行っています。このバスの利用が可能になっ

たのも皆様の支援のお陰です。礼拝で子どもたちの笑顔が見られ、歌声を聞いたことに感謝します。

◇光をもたらし働き——ポルトアレグレにて

ポルトアレグレにあるルーテル神学校の近くにも一つの「光」がありました。それはアソシアサン・パンドルガという未成年精神障害者用のデイケアセンターです。この施設はJELAとは直接の関係はありませんが、同じ事業目的を持つ団体として、良い働きの例だと思います。パンドルガでは主に自閉症の子どものために、共に遊び、共に学ぶ場所を与えています。パンドルガのディレクター、ハイジ・キリストさんによると、以前はこのような障害を持つ子どもに対して親は恥の意識を持ち、長いあいだ家庭内に閉じ込めて隠していました。そこで、キリストさんはこの施設を建てる際に、扉や壁にできるだけ多くの窓を取り付け、あらゆる箇所から外の光が入るように設計しました。この明るい環境の中で過ごすことも影響して、子どもたちは色々な面で才能を発揮できるようになったそうです。また、なるべく外の庭で遊ばせるようにしたところ、近所に住む子どもたちがそれを見て、遊びに来るようにもなりました。

ブラジルの「影」の部分はまだ広大なものです。しかし、その中でさまざまな方の働きと支援が「光」になっていることが確認できました。この方たちの奉仕を感謝しつつ、今後もこの光が広がることを祈ります。

劇団「アルチマーニャ」

ヘコンシリアサンの情操教育プログラムの一つに演劇があります。娯楽には縁が薄く、しかし家庭内にはさまざまな困難を持つファヴェーラの子どもたちにとって、演劇は大きな楽しみであると同時に、表現力、創造力、チームワーク、問題意識を養うという視点から大切な意味を持っています。

ヘコンシリアサンは今回の私たちの訪問を、劇団「アルチマーニャ」によって歓迎してくれました。食事スペースのイスとテーブルを除け、にわか舞台を作り、青少年センターのおよそ300名の子どもたちと共に、劇団員の抜群のリズム感と若さに溢れるダンス、ブラジルの地方の歌、ファヴェーラの日常を題材にした寸劇などを楽しみました。最後にはグリテバック事務局長も劇団員のダンスの輪の中に引き入れられ、若者に負けないダンスのタラントを披露する楽しい場面もありました。

これまでも、また現在も、ヘコンシリアサンの劇団はサンパウロ市内外の保育所、学校、地方団体等から数多く招待され、公演を行っています。中でも特筆すべきはドイツのルーテル教会が国際文化交流プログラムとしてこれまで数回ヘコンシリアサンの劇団をドイツに招待していることです。私たちが訪問したとき、「アルチマーニャ」はドイツ公演を一月後に控え、正に最後の仕上げに余念のない時でし

た。劇団の男の子に質問すると、「初めて海外に行くので、とても興奮しているし、そのために一生懸命に練習している」と思いを熱く語ってくれました。

皆様の中には1997年にヘコンシリアサンの「明日の星」劇団が来日し、日本の各地で「R.U.A.」(道)を公演したのをおぼえている方も多くいらっしゃるでしょう。この公演は「日本ブラジル子ども支援ネットワーク」が企画・招聘し、当時日本福音ルーテル教会の信徒運動体であった「ブラジルのストリート・チルドレンを支える会」が京都、名古屋、東京のルーテル教会・神学大学での公演を協賛した形で実現したものでした。ドイツのルーテル教会の招待は、私を知る限りでは今回で4回目になります。私は以前から、日本でも再度同様のことができないものかと密かに考えていましたが、今回の出張でますますその思いを強くし、真剣に祈るようになりました。ダンスは別にして、彼らの歌唱力と演劇のレベルは決して高いとは言えません。しかし、1997年の経験からも、もし日本公演が実現するなら、彼らにも私たちにききとすばらしい恵みの機会になることを確信しています。皆様のお祈りとご支援を心からお願いいたします。(古川記)

●イメージの逆転

(田崎夏子／熊本県在住・17歳)

私は全然、教会にも通ってないし家や両親もキリスト教とは関係なくて、今まで神様とか信仰とかを意識しないで生きてきた。でも、このホームステイとキャンプに参加して初めてお祈りをしたり、神様について考える時間があったりして、神様や宗教って何だろうって思った。特に日本に住んでいると宗教や信仰が大切な事とは感じないけれど、アメリカに行ってみると一緒に祈りをしたり、神様の存在を考えたりして、神様の存在を信じることで本当に多くの人々が支えられて生きているんだと感じた。それに私は今まで宗教とかに対するイメージは弱い人間が神様にすがって助けを求めるっていう、あまり良くないイメージを持っていたけれど、それは逆で、私みたいに何も信じてなくて信じる対象を持たずに生きている人間が本当に弱い人間なのかなと思った。



●十字架へのキス

(古島 悠／熊本県在住・16歳)

何曜日だったか自由に祈る時間があったので、私は十字架の前で祈りました。私は本当にイエス様と歩んでいけるのか、歩める資格があるのかと、けっこうな時間祈り悩みつづけました。ふっと視線をあげると、同じワークサイトの人が十字架にキスしていくのが見えたんです。それが、なんというかイエス様に親しみを持っているように見えました。そのおかげで、私の想いが一気に変わりました。遠くて高い王座にすわっていらっしゃるのではなくて、本当に、私たちのすぐそばにイエス様はおられるんだということに気づかされました。そして、私が教会に行きたくなかったのはそれが理由だったんだと気づきました。仰ぎ見るだけじゃなくってもっと近くにいたいと思っていたんだなあということに今更気がつきました。それに気づいた時、自分なりでいいと、イエス様の言葉をもらった気がしました。



古島さんのお母様からの便り

娘は水曜日に無事帰宅し、アメリカでのことを嬉々として話してくれました。何より、神様を身近に感じる事ができたと言ってくれたことが、とても嬉しかったです。

●神様の愛

(望月希美／甲府市在住・14歳)

“神は私達が神から離れていても私達を愛する”という言葉は本当だと思います。私は今まで、教会や聖書、神様やイエス様から離れた生活を送っていました。しかし、それでも神様は私を愛し、グループ・ワークキャンプに参加させてくれました。そして、私への愛を私に気づかせてくれました。初めて神様の愛を感じた時の気持ちを忘れずに、これから教会に通おうと思います。



2度目の参加者の感想

●欠点への気づき

(石川恵美／田園調布教会・17歳)

私が泣いているのに気がついたcrew(クルー:作業仲間)のメンバーは、ハグ(抱擁)をしてくれて一緒にお祈りもしてくれました。泣いている理由も分からないのにみんなが優しくしてくれてお祈りもしてくれた…その時にcrewの優しさに本当に気がつく事ができ、そして自分にとって足りないものが見つけられた気がしました。普段生活している中で、周りの困っている人や悩んでいる人に対しての優しさが足りないのかもしれない…きっと神様がこの事を私に教えたかったのかなと思いました。



●神様の「みち」

(平岡 恵／徳山教会・21歳)

一緒に日本から来た子たちの前で笑うことはできても、悩みを相談することがなかなかできませんでした。誰かに聞いてほしくて、日本人スタッフの元へ相談しに行ったとき、涙が溢れて止まりませんでした。今年は21という最年長で、みんなのお姉さんとして頑張らなきゃいけない



ない、と頑張りすぎていたのかもしれませんが。アメリカに行ったのだから、変わらなければいけないと、自分を追い込んでいました。でも、そんなことをしなくても、神様は私に「みち」を示してくださっていました。変わらなければいけないのではなく、気づいたときに自分は変わっているのだと思います。

●別の楽しさ

(名嘉望実／小岩教会・14歳)

人生二度目のワークキャンプに参加して、とてもよかったです。一度目とはまたちがった／



／飲料を冷たく保つための大きな箱)等)を運ぶのを手伝ってくれました。まず両方の水を捨てて、運ぼうとしていると、中身が入っていてまだ重たいクーラーの方をAndreaが一人で抱えはじめたので、急いで半分持とうとすると大丈夫と言って歩きはじめました。私のクルーのクーラーは、取っ手がなく、持ち上げなくてはなりません。その上大きいので、Andreaの手にはギリギリで一人で持っていくには難しすぎま



／楽しさがあ、また来ようという気持ちにさせてくれました。

その他の参加者の感想

●笑顔

(澤田美咲／玉名教会・17歳)

ワークキャンプを通して、私は多くの人の支えによって生きている、というのを強く実感することができました。なかでも、「笑顔による支え」は印象的で、私にも出来ることです。言葉がうまく通じなくても、伝えたいことがうまく伝わらなくても、一緒に笑っていれば心が通じている気がする。楽しいから笑う、嬉しいから笑う、それだけではなく、共に幸せを感じたいから笑う、笑ったら楽しくなる、笑ったら嬉しくなる、私の記憶の中にも、写真の中にも、たくさんの人の笑顔がぎっしり詰まっています。



●折り紙

(石居悠大／三鷹教会・14歳)

レジデント(修理する家の住人)の家で働いた最後の日、その家の孫たちが手伝いに来てくれていた。休憩のときに、「いつまでここに来るの。」と孫たちにきかれた。ぼくが、今日が最後だといったとき、孫の次男のクリスが自転車を取り出し9ブロックも離れた家まで折り紙を取りに行った。汗みどろになって帰ってきたクリスは、僕に折り紙を突き出して、「お願い。折り紙を教えてよ。」と言ってきた。僕は、よし、と思って鶴を折って見せた。すごくうれしそうだった。すると何十分か後に、クリスが折り紙で猫を折って家から出てきた。「これしか折れないけど。今までで一番よくできた。」と僕にプレゼントしてくれた。僕は、胸が熱くなって突っ立っていられなくなってしまった。



●助け合い・分かち合い

(横田春菜／蒲田教会・14歳)

一週間みんなと一緒にワークをして、私一人言葉が通じなかったけれど、それ以上の何か、みんなが通じるものがありました。困ったときは、助け合いました。楽しいことは、一緒に楽しみました。私も、みんなの仲間に入り、一緒にいろいろな感動できたことを感謝いたします。



●前向きな姿勢

(卯野木碧／玉名教会・15歳)

あんなに始めの方は不安でいっぱいだったのに、だんだんとクルーと過ごすのが楽しくなっていくのはやはり、気持ちが前向きだったからだと思います。なんでもあきらめずとにかく挑戦してみる、一生懸命尽くす、そんな気持ちが自分を変えたのだと思います。



●コミュニケーション意欲

(山口香帆／田園調布教会・16歳)

私がアメリカに行ってから変わった事としてあげられるのは一つしかありません。それは、自分以外の人と話す時、「相手に自分の考えを伝えたい。」と言う気持ちを持つようになった事です。ワーク中でも英語はつかうのですが、生憎周囲の喋る速さについていけない私は、身振り、手振り、顔の表情で話すうちに気持ちが大事だと気づいたからです。



●小さな奉仕

(テレジア下条のゆり／浅草聖ヨハネ教会・14歳)

私は、キャンプのテーマ“Full Service”という



した。なので、何度も代わろうとしたのですが、彼女は『いいえ。』と聞きませんでした。まわりの人たちも心配そうに代わろうかなどと声をかけていましたが、『最後までやりたい!』と言い、途中何度か休憩をとったりして最後までやり遂げてしまいました。やりとげるまではとても心配だったけれど、ものすごく嬉しくて、まるで自分の事のように喜びました。そしてハイタッチをしました。その事があって思った事は、Andreaは不完全にうまれたのではなく、彼女には十分すぎるくらいなのだという事。彼女にはやり遂げられるから神さまはあの手を与えたんだなという事です。出来る範囲の事でがんばりました! ではたりないんだあ。自分の出来る範囲以上の事をやってこそ人に感動を与える事ができるのだという事を感じました。

のは、自分の感性をFull（存分）にはたらかせ、人のことを考え思いやりそして奉仕をすることだ、と考えます。スタッフの恵理香さんが言っていたとおり、奉仕は周りの人に気付いてもらえる事ばかりだとは限らないですし、もしかすると気付いてもらえない事のほうが多いのかもしれませんが、しかし、神様はいつも私達一人ひとりと共にいて、見守ってくださいます。ですから私はたとえだれにも気付いてもらえないような小さなことでも自信をもって奉仕していきたいと思います。

●英語

(澤田聖香／玉名教会・16歳)

みんなと別れるときはとてもつらかったです。もうこれで一生会えなくなるかもしれないということももちろんつらかったのですが、それ以上に英語の話せないわたしには自分の思っていることや感謝の気持ちを伝えることができないまま別れなければならなかったことがつらかったです。そのため、わたしは自分の気持ちをいろんな人に伝えるため、これからちゃんと英語を勉強して話せるようになりたいと心から思いました。



●主に委ねる

(神崎のぞみ／名古屋めぐみ教会・20歳)

このキャンプで出来るようになったことは主に委ねるという事です。不安なことは沢山ありましたが、いつも主に委ね、任せます、と祈っていたら、心に平安が与えられました。今まで主に委ねますと祈りながらも委ねきれずにいて、不安でいっぱいでした。だからこれからはこの

キャンプの時のように全て主に委ねていきたいと思います。



●ホームステイ

(後藤理奈／室園教会・16歳)

毎日毎日あつという間で、寝る時間も悔しいくらいでした。そして、アメリカの人は子供をすごく愛しているなあと思いました。そんな暖かい家庭にホームステイすることが出来てよかったです。



●奉仕される自分

(鈴木はるな／名古屋めぐみ教会・16歳)

ワークキャンプのテーマがFull Serviceだったので自分が奉仕することを考えていたけれど、自分が日本人メンバー、クルーのメンバー、ホストファミリー、日本にいる家族や教会の人達、みんなからFull Serviceを受けていたことに気付くことができました。これからは、みんなから受けたFull Serviceをみんなにしてあげられる生活をしていきたいです。



●神様への奉仕

(石川実可子／名古屋めぐみ教会・15歳)

いつもワークをするときには、自分の全てを奉げて、神様に仕える気持ちで働いていました。そういうことを考えながら、ワークをしていくうちに普段の日常生活からでは得られないような喜びや感謝の気持ちをもてるようになり、神様に奉仕をするということがこんなにも喜ばしいことなんだということを思うようになりました。



石川さんのお母様からの便り

日焼けして、満面笑顔で到着ロビーから出てきた実可子の第一声は「メッチャ、楽しかった！ まだ、帰りたくなかった」でした。健康のこと、言葉の問題、その他、初めての海外で戸惑うことも多かったのではと心配して出迎えた私たちでしたが、その心配を実可子の笑顔がすべて打ち消しました。帰りの車の中、「お母さん、Full Serviceというのはね……」、あふれ出るように楽しかったアメリカでの体験を夢中になって話す子どもを見ていて、本当に今回のキャンプに参加させていただいて良かった、と思いました。

2007年度グループ・ワークキャンプ派遣者募集要項

以下の内容で、来年夏の派遣者を十数名募集します。申込受付期限は1月末日です。

◆派遣期間：7月24日(火)～8月7日(火)

◆内容：ミネソタ州で数日間のホームステイ。アイオワ州Waterloo地区で開催される一週間のキャンプ(家屋修繕奉仕、聖書の学び、賛美と分かち合いの時間等を通して、参加者の信仰成長を促す催し)に参加。

◆参加費：18万円(パスポート取得費用及び海外旅行保険費用は自己負担)。一括払いが困難な場合は、分割のご相談もお受けします。その他、参加費に関するご質問・ご相談は、JELA事務局まで。

◆問合せ・申込用紙請求先：日本福音ルーテル社団(JELA)

住所：150-0013 渋谷区恵比寿1-20-26

電話：03-3447-1521／ファックス：03-3447-1523／email：jela@jela.or.jp

◆選抜方法：2007年1月31日(水)までにJELA事務局に申込用紙が届いた人の中から、書類選考(場合により面接実施)で派遣者を決定し、3月中旬までに本人に連絡します。

*注意事項

①2007年8月1日現在の年齢が14歳～20歳の方が応募できます。

②キャンプは米国の団体が主催し、キリスト教超教派で運営されています。一つのキャンプ地には400名前後のアメリカ人青少年が集います。

クリスチャンでない方も参加できます。聖書から学び、話し合う時間(英語+日本語)が毎日あり、すべての行事に積極的に加わることが参加の条件です。

③牧師を含めた数名の日本人成人が同行し、言語的、霊的側面から日本人参加者を支えます。

④主催団体との手続き等に時間がかかるため、申込期限が1月31日になっています。

⑤参加確定後にキャンセルする場合、その時点までに発生した費用をいただくことがあります。

⑥参加確定者には、日本福音ルーテル教会が毎年3月下旬に実施している青少年クリスチャン向けキャンプ「春キャン」への参加を強くお勧めします。

教会になじみのない方は、クリスチャンのキャンプを事前に体験しておくことが望ましいですし、米国に行く仲間どうしが出発前に親しくなる機会でもあります。「春キャン」の詳しい情報は、グループ・ワークキャンプ派遣決定通知送付の際にお知らせします。

ごくごく、あたりまえのこととしての難民支援

ジェラハウス住込管理人 鈴木律文



一. 自己紹介

ジェラハウスは、泊まる所や住む場所の無い難民申請者とその家族のためのアパートです。現在、6世帯9名の方々が暮らしています。僕は2003年3月から住込管理人をしています。

僕の役目は、居住者が安全に、そして安心して暮らせるよう見守ることです。その内容は、①建物と部屋の管理、②入居時の必要事項の説明、③緊急時における初期対応、が挙げられます。それぞれ具体的に言うと、①電球の交換や退室時のシーツの洗濯、②ゴミの出し方や共同シャワーの使い方などの説明、③居住者が急病になった際の事務局と支援団体への連絡、病院までの付き添い、などです。

二. 管理人としての喜び、哀しみ

住込管理人となってから4年目になります。これまで20名ほどの難民たちと、出会いと別れを経験しました。

出会いの形は様々です。彼らは大抵やつれています。それは日本に逃れて来たのはよいものの寝場所の当ても無く途方に暮れていた、本誌第8号で紹介されたピーターさんのように何回も住む場所を変えなくてはならず、自分が漂流者であるとの思いを募らせるからでしょう。しかし、3〜4日もすると皆穏やかな表情を取り戻します。その表情に出会えたとき、僕は最も喜びを感じます。と同時に、ただただ落着いて寝られる場所があることが、いかに大事か痛感させられます。

一方、別れの形は様々です。

まず、ピーターさんのように安定した在留資格を得るなどして自立の目途が立ち、退室する場合があります。これは最も幸せな形です。今年

の正月、スウェーデンでの第三国定住が認められた

め退室した難民から年賀状(写真下)をもらった時も、とても嬉しい気持ちになりました。

しかしながら、残念な形での別れもあります。一つは蒸発です。「風邪が治らないので友達の家で静養する。しばらく戻らないから鍵を鈴木さんのポストに入れておく」と電話があったつぎ音信不通になったケースがありました。次の居住者受入れのために部屋を整理していると、本国での様子を写した写真やアルバムが大量に出てきました。本国を脱出する時でさえ持っていた写真を、ジェラハウスから失踪する際には全て置いていった彼、哀しくてなりません。

二つ目は入国管理局に収容されてそのまま事実上退室となる場合です。これまで2回ありました。法務省での手続を終え難民として認められなければ在留資格が無くなるのですが、それでも難民としての保護を訴える人々がいます。ジェラハウスにはそのような方も居住しているのですが、法律上は強制送還可能な状態にあるため、収容される余地が出てきます。住所もあり、他人に危害を加えるおそれもないのに収容されてしまうことに、怒りを禁じえません。

三. 最近感じていること

私は住込管理人をするにあたり、無力であることを心掛けています。

みなさまは、これを聞いて訝しく思われるかもしれません。無力でどうして難民支援ができるのかと。しかしこれには理由があります。

最初、私はケースワークもどきで積極的に働きかけていました。しかし、それは衝突を招き、結果的に難民のこころを不安定にさせていました。これでは本末転倒です。

そこで、彼らの日常の側に立つ私は専ら受容に務めること、具体的なケースワークや法的支援は日常から離れた場所にいる専門家に任せることにしました。なぜなら、安全に、そして安心して暮らせるように

見守る管理人の仕事は容易に監視に転化する可能性があるからです。とすると、難民がジェラハウスで安心して暮らすには、私が権力を持っていないこと、水平の関係にあることを示す必要があると判断したからです。

もともと、これは無関心、消極的態度と紙一重です。そのために蒸発という事態を招いたのかも知れません。なので、まだ何が正しいのか結論が出ないでい

ます。

ただ、次のことは確信を持っています。自分はごくごくあたり前のことをしているに過ぎないし、難民支援も特別なことではなく、普通の人の日常の営みの範疇であるということです。

私がしているのは、日本語で届いた手紙を読み聞かせたり、一人だとなんと多い果物をお裾分けしたり、近所のスーパーや公共施設の場所を教えとか、伝言するとか、CS放送で流れた母語の映画を録画して渡すとか、そんな類のことです。しかし、そのようなやり取りが難民に笑顔を生み出します。僕も嬉しくなります。

でも、これって考えてみれば、よくあるご近所付き合い、助け合いです。確かに難民には、ことばの問題や迫害のトラウマなどによる精神的苦痛を抱えているといった特殊性があります。しかし、これも乱暴に分類すれば、相手の状態を考えて接するだとか、耳の遠いお年寄りに嘸み砕いてゆっくり説明するといった普通のコミュニケーションの心得と余り変わらないと思うのです。

だから、私は、いつか住込管理人を辞めたとしても、その後生活する場所で、難民支援ということでもなくともこのような共に生きる営みは続けていかなければならないと思うし、もしかしたら、本誌の表紙の冒頭にある「マタイによる福音書 第25章35〜36節」は、救い主イエスからすれば、そんなごくごくあたり前のことを述べたに過ぎないのかなと思い、まだ非キリスト者である僕にとっても、その言葉はとても身近なものに感じられたりするのです。





かねてよりお知らせしていました「チャリティ・キルト展」が、いよいよ11月11日(土)より17日(金)の午後1時より6時まで、ジェラ・ミッションセンターホールにて開催されます。アメリカ各地の教会と日本の支援者から送られた40数点のベッドカバーなどのキルト作品が展示されます。これらの力作を見て楽しむだけでなく、期間中に入札していただいて最終日に落札するというオークション形式で販売されます。そして売上金はブラジルおよびインドの子ども支援のために用いられます。これらの作品づくりに協力して下さいました方、おそらく数百人に及ぶと思われます。

最終日は同時開催として昨年同様「ワインとチーズのパーティ」を行ない、おいしいワインを飲み比べながらキルト・オークションに参加して秋の夕べをお楽しみ下さい。

お知らせ

インド・ワークキャンプ参加者、 ただいま募集中!

来年2月18日から26日にかけて実施する第3回インド・ワークキャンプ(JELA+JELC主催)の参加者を募集しています。義足作りの奉仕補助、子どもたちとの交流、現地の開発地域の視察研修等と、ビデオを用いた毎日の聖書の学びを組み合わせたプログラムです。参加費12万円。18歳以上の方(ノンクリスチャンも歓迎)十名前後で実施予定のところ、まだ若干の余裕がありますので、興味・関心をお持ちの方は、JELA事務局までお問い合わせください。12月10日の締切が迫っていますので、お急ぎください。

アジア子ども支援 インド・ジャムケッドの女性訓練センター建築を支援

JELAはインドの支援地ジャムケッドと協力して、現地に女性用訓練センターの建築を計画中です。この建物は、田舎の貧しい女性たちに基礎的な保健知識の訓練等を行うために利用されます。完成のあかつきには、毎年千人の女性に訓練を施すことが可能です。現在、日本の外務省からの資金協力の可能性を探っているところです。また、皆様から「アジア子ども支援」にいただいた献金の未使用分が四百万円以上あり、これも上記建築費用の一部に用いる予定です。お捧げ下さった皆様に感謝します。計画の進捗にあわせて、この欄で逐次ご報告します。

奨学金制度 バングラデシュの二人の高校進学を支援

10月にJELA奨学金委員会はバングラデシュの学生2名(Ms. Anna Akhtar, Mr. Zakia Hossen)の高校進学支援を決定しました。支援期間は高校在学中の2年間です(*現地の高校

は2年制)。お二人は今まで日本福音ルーテル教会「共に生きる」とRDRS(LWF関連のNGO団体)の活動により、郵政公社の国際ボランティア貯金からの支援金で中学まで卒業することができましたが、公社の支援期間終了に伴い高校進学が絶望的な状況でした。高校卒業後に地元で教師になることを希望している学力優秀なお二人を支援することは、バングラデシュの将来及びJELAの公益活動にとって大変有意義なことです。



HeQi展好評のうちに終わる

中国人クリスチャンアーティスト、ヘイチさんの作品展が去る10月20日より25日までジェラ・ミッションセンターにて開催され、多くの方が来場され、彼のユニークな作品を楽しみ、お買い上げいただきました。JELAでは売り上げの一部を、今後アジア、ブラジルの子どものプロジェクトに用いさせていただきます。ありがとうございました。



●各プログラム支援献金

荒井梯次郎・和子／青山昌子／アクストン・ケビン／石澤とし子／池谷節子／石田浩子／石原寛／市原周子／伊東節子／ヴァンデルタング・エリ子／塔淑代／江澤妙子／大塚眞佐子／大中真理／小川晶人／乙守ミチ子／加藤悦子／希望教会／九州ルーテル学院大学特別講演会委員会／京谷信代／清田純次／釧路教会／窪田鉦子／倉重ミドリ／周田裕芳／白髭市一郎／関本憲宏／高橋悠美子／玉名教会／東郷優子／鳥居和代／鳥飼勝隆・豊子／中村孝治・敬子／中道本枝／芳賀明子／芳賀直哉・美江／早瀬康平／藤井浩・礼子／藤橋日出子／福田陽子／星野聖明／細山千恵子／松田美智子／益永篤／南谷なほみ／宮崎典子／宮澤真理子／牟田青子／モック・ケネス／森涼子／森田雅子／森部信／八坂由貴子／山泉順子／山崎恵美子／山本一男／山本弘美／山本了／若原奇美子／渡辺映子・高伸／渡辺聡／Gustavus Lutheran Church／Our Savior's Lutheran Church／他匿名数名

●賛助会費

青山昌子／尼嶋治／石澤とし子／ヴァンデルタング・エリ子／大江紀久子／小川晶人／乙守ミチ子／上窪松子／河合英子／木村猛・富久子／小石川教会／児島和子／小宮俊作・武子／坂本照光・陽子／尻無浜紀美子／鈴木辰典／高橋トヨ子／高橋佳子／田中美紗子／外山訓子／鳥飼勝隆・豊子／西一郎／日野原直明・真紀／平島徳蔵／細山千恵子／宮永利智／森涼子／森部信／山崎恵美子
他匿名数名

以上、敬称略。ご協力ありがとうございました。
匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお申し出下さい。

編集後記

インドの詩聖タゴールは謳いました。「私は眠り夢見る、生きることが喜びだったらと。私は目覚め気づく、生きることは義務だと。私は働く――すると、ごらん、義務は喜びだった」。シェイクスピアは書きました。「我々がここにあるのは、自分のためではなく、他の人々の人生をより幸せにするためである」。そして、イエスは言いました。「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」(マタイによる福音書7章12節)。
今年一年と来年への思いを込めて、上の言葉を記します。(M)

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association
日本福音ルーテル社団
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
Tel. 03-3447-1521 Fax. 03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp
口座番号 00140-0-069206 加入者名 日本福音ルーテル社団